グランドスラム東京２０２５

令和７年１２月６日（土）から７日（日）までの間、東京体育館において実施された国内唯一の国際大会、グランドスラム東京２０２５に内村３尉以下３名の選手が出場した。１１月に千葉ポートアリーナで実施された講道館杯において出場権を得た３名は、初日に女子５２ｋｇ級で**坪根菜々子**（つぼねななこ）３等陸尉、女子４８ｋｇ級で**吉岡光**（よしおかひかり）２等陸曹が出場し、坪根３尉が準優勝の成果を収め、昨年のグランドスラム東京より一つ上の銀メダルを手にした。２日目には**内村秀資**（うちむらしゅうすけ）３等陸尉が男子７３ｋｇ級に出場し、第３位で銅メダルを獲得した。

女子５２ｋｇ級に出場した坪根３尉は、初戦をビートン選手（カナダ）に押さえ込み一本で勝利、２回戦もトロ選手（スペイン）にゴールデンスコア６分５秒に抑え込み有効で勝利し順調に駒を進めた。準決勝は日本の藤城心選手（三井住友生命）に開始１分４秒で抑え込みが有効となりポイントを獲得。そのまま４分間の試合は終了し、ここまでの３試合全てを抑え込みで勝利して決勝進出を決めた。決勝戦は今年の世界選手権を制し、来年の世界選手権出場に王手をかけた阿部詩選手（パーク２４）。坪根３尉と阿部選手の対戦は２０１７年のインターハイの決勝で阿部選手に敗けて以来、実に８年振りの対戦となった。世界が注目するこの一戦は組み手争いから始まり、お互いに右組の相四つの状態で技を繰り出すタイミングを図りつつ一瞬も気が抜けない時間は進む。寝技に持ち込みたい坪根３尉と立技で勝負したい阿部選手。有効となる技が繰り出せない時間が続いたが、２分８秒に阿部選手の大外刈りが有効となった。坪根３尉も必死の反撃を試みたがそのまま４分間が終了し、最後まで得意とする寝技に持ち込む自身のスタイルを貫き大健闘を見せた坪根３尉は銀メダルを獲得し大会を終えた。試合後、坪根３尉は「決勝戦で負けたことは悔しい。阿部選手との差は大きいと感じた。いつもは大きな大会が終わると安堵していたが、今は気を引き締めて次の大会に向けてやるべきことをやっていきたい。」と来年に向けて意気込みを語った。

男子７３ｋｇ級に出場した内村３尉は、初戦のカン選手（韓国）に抑え込み一本で勝利すると、続く２回戦もカリモフ選手（チェコ）に合わせ技一本で勝利し準々決勝進出を決めた。準々決勝はオドゲレル選手（モンゴル）との対戦となり、３分５１秒に抑え込み一本で勝利したが、準決勝で木原慧登選手（東海大）に敗れ３位決定戦にまわった。銅メダルを賭けた３位決定戦は、東京五輪銀メダリストのシャフダトゥアシヴィリ選手（ジョージア）との一戦に臨んだ。試合開始直後から激しい技の掛け合いとなるも冷静に戦況を見極めつつ隙を見つけては技を繰り出していく。そして２分４０秒が経過したところで内村３尉が一気に間合いを詰め、投げの体勢に入るとシャフダトゥアシヴィリ選手が内村３尉の脚を払い応戦した。一瞬宙に浮いた内村３尉だったが、左脚を着地させるとそれを軸に一気に体重をかけて相手を倒して一本勝ちを収めた。表彰式後、内村３尉は「目標とする優勝には届かなかったが、準決勝で敗れた後は会場まで足を運んでくれた皆さんの声援で気持ちを切り替えて３位決定戦に臨むことができた。応援してくれている皆さんに少しでも恩返しをしたい気持ちで戦い、銅メダルを獲得できて良かった。これからも大会は続いていくが、あまり先を見すぎることなく、一戦一戦乗り越えていきたい。」と感謝の気持ちを語った。

柔道班監督の酒井２等陸佐は、「今回のグランドスラム東京は極めて重要な大会だった。その舞台で選手が全力を尽くして戦い、多くの収穫と課題を持ち帰ることができた。３名とも敗戦はすべて日本選手に対するものであり、世界の中でも突出したレベルの国内勢と正面から渡り合うことができた点は今後の強化に大きく活きるはず。結果に満足することなく、世界の頂点を目指してさらに研鑽を積んでいく。」と大会を振り返った。